

研究題目「生きた民族芸能：ニュージーランドのマオリによるカパハカの取り組み」

土井冬樹

神戸大学大学院博士後期課程

マオリの民族芸能であるカパハカは、伝統的なものである一方毎年のように新しく作られては消えている。本発表では芸能の歴史と現在の活動実践を報告し、かれらが現代社会の中で民族芸能を実践する意義を提示する。

問題意識

芸能や儀礼、祭りなどでは、その担い手となる人々によって伝統が引き継がれている。たとえば八尾のおわら節のような民謡などの地域の伝統芸能、トルコのアレヴィーの人々によるセマーのような儀礼的なパフォーマンスなど、伝統的な型があり、それが代々引き継がれている。こうした「伝統的なもの」は、時に始まった当初から変わらないものと認識されていることもある。そして、担い手たちは、その「伝統的なもの」を絶やさず次世代に教えることを重要視している。一方で、ニュージーランドの先住民であるマオリの歌や踊りは、伝統的に引き継がれてきたものがある一方で、毎年のように、歌や踊りの全国大会のために新しいものが作られている。マオリの歌や踊りは文化的な意味を失いイベント化したようにも見えるが、踊りのグループの参加者は、文化を守るために踊っていると述べる。では、毎年新しく作られる歌や踊りと「伝統的なもの」あるいは文化的なものとは一体どのように関わっているのだろうか。

本発表では、マオリの歌や踊りに関わるグループが舞台に立つまでにどのような過程を経て歌や踊りを作り学ぶのかを明らかにする。「伝統的なもの」を引き継ぐわけではなく、新しいものを作り出し続けるカパハカは、歌や踊りそれ自体を伝統化・固定化しないことで、むしろ現代の西洋主流のニュージーランド社会で文化を活発にし、文化復興・維持の文脈の中で大きなダイナミクスを作り出しているのである。

マオリの歌や踊りの歴史

カパハカとは、マオリの歌や踊りを一連のプログラムの形式でまとめたものを指す。カパは列や集団、ハカは踊りを意味し、カパハカで列になって踊る踊りや集団の踊りという意味になる。これらの踊りは、演者が歌いながら踊る。そのため、歌にも踊りにも歌詞がある。その理由は、歌や踊りの起源と関わっている。

もともと文字を持たなかったマオリにとって、歌や踊りは歴史を後世に伝える手段の一つだった。歓待儀礼や葬式などの場で演じられてきたが、1840年にニュージーランドが植民地化されると、西洋人が観光に訪れるようになり、観光ショーの見せ物として演じられるようになった。一方で、生活が西洋化してきたため、日常生活の中で、もともとの文化的文脈の中で歌や踊りを演じる機会は減ってきていた。

20世紀初頭、西洋化する社会の中でマオリ文化は着実に衰退していた。マオリのエリートは、新しい踊りの形式を作り出すことでマオリの興味を集め、文化を維持するために歌や踊りを用いる可能性を示した。その後、20世紀中頃には、ニュージーランド各地で歌や踊りのグループが設立した。すると、各地のグループは地域ごとに集まって、どこのグループの踊りがうまいかを競い合う大会を開催するようになった。

1972年、そうした大会を集約する形で、全国カパハカ大会の第1回が開催された。隔年開催となったこの大会は現在まで続き、第1回開催時には17だった参加グループも、直近の2018～2019年の大会では159グループが参加するまでに成長した。

歌や踊りのグループの実践

全国カパハカ大会に参加するグループは、40人で構成される。男女それぞれ20人ずつである。その中で、歌詞を作り、メロディをつけ、新しい振り付けをつけて大会に臨む。大会では、六種類のパフォーマンスとマオリ語が審査の対象となる。パフォーマンスでは、全員が乱れずに踊っていたか、道具を落とさなかったか、文化的に正しい所作で踊っていたか、歌詞が適切に書かれていたか、歌詞に適切な振り付けをつけていたか、などの点で審査される。

カパハカグループは、このような大会に参加することを目的に作られたグループである。大会のために、毎年新しい歌や踊りを作り、それを学び、披露するのがこのグループが主にしていることである。ここには、同じ踊りを伝統として引き継いでいくのとは明らかに異なる実践が繰り返されている。一方でそれは、脱文化化した芸能であることを意味しない。グループのメンバーは、カパハカは文化の一つだし、文化を守るための手立てだから参加していると語る。それは、カパハカが単なるパフォーマンスである以上に、西洋主流のニュージーランド社会でマオリが集まる場所を提供し、歴史を伝え、文化的な実践を行う機会となっていたからであった。